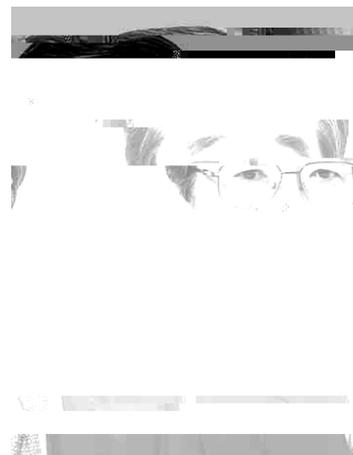


# 巻 頭 言

スチール システム主監

菊川 裕幸



『情報システム』は、の飛躍的な進歩により大きく変貌を遂げてきた。が日常生活の中にまで入り込み、企業活動がなくては成り立たない状況になっている今日、技報でシステム特集号が発刊されるのも非常に意義深いものがあると感じている。

システムが活用され始めた初期の頃は、「どのように仕事や作業を効率化するか」という視点で業務分析や作業の標準化が行われ、色々な『作業の自動化』を進歩させてきた。鉄鋼業界も10年代から世界に先駆けてシステム化に取り組み、製鉄所ではプロセスコンピュータと組み合わせて、本社スタッフ部門は膨大なデータを取り扱う手段として、効率化・省力化を推進し、日本鉄鋼業の競争力を高めてきた。

システム化の流れは情報を戦略的に活用する方向に進み、企業内の情報をデータベース（ ）に一元管理して『情報管理（活用）』を行う（

）の考え方などが発展してきた。10年代にはパッケージソフトを適用して生産性を高める事例が、欧米で多く見られるようになった。日本では、効率化と情報活用のためのシステム改造を局所最適で繰り返し、システム構造の複雑化とブラックボックス化を増大させてしまった。結果として、システム統合などの抜本的改革が難しくなり、全体最適を目指す『情報管理』の視点でのシステム改革活動の停滞を招いていた。

そして、企業の競争力は

で情報処理スピードを飛躍的に向上させて人が果たすべき役割を付加価値の高い領域にシフトさせていくなど、の活かし方は広範囲になってきている。

3つの視点『作業の自動化』『情報管理』『ビジネス変革』のすべてを包含し、統合によりいっそう複雑化したシステムを一新した上で、

世の中の変化や利用者ニーズに迅速に対応できるシステムが必要であった。 -  
は、最新 を積極的に適用して、ビジネス変化への対応が俊敏かつ柔軟にでき、鉄  
鋼版 として成長できるシステムの構築を目指して、情報子会社と一緒に自社開  
発してきたものである。

-